

# 国立国語研究所学術情報リポジトリ

〈著書紹介〉 影山太郎 編『日英対照  
名詞の意味と構文』

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2015-10-30 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 影山, 太郎 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.15084/00000705">https://doi.org/10.15084/00000705</a>

影山太郎 編

『日英対照 名詞の意味と構文』

2011年11月 大修館書店

A5判 xi+324ページ 2,500円+税



影山 太郎

本書は、多くの大学・大学院で採用され好評を得ている『日英対照 動詞の意味と構文』(2001年)と『日英対照 形容詞の意味と構文』(2009年)に続く入門書で、動詞、形容詞、名詞という主要品詞を論じた三部作の締めくくりとなる。

形容詞のない言語はあっても、名詞(として機能する単語)と動詞(として機能する単語)の区別はすべての言語に共通して存在すると言われる。それは、文というものが、典型的には動詞が担当する述語と、典型的には名詞が担当する項によって構成されるという文法的な要請による。しかし、述語と項の文法的な結びつき方は突き詰めると、述語に備わった語彙的意味によって概ね決定されるというのが語彙意味論の考え方である。本書は、この語彙意味論の考え方をベースにして、名詞の意味と統語的用法を初心者向けに解説することを目的としている。理論的分析のツールとしては、James Pustejovskyの〈クオリア構造〉の考え方を利用しているが、難解な論理記号や公式を避け、できるだけ平易な言葉遣いで説明することにより、初心者・若手研究者をこの方面の研究にいざなうことを意図している。

Beth Levin(1993) *English Verb Classes and Alternations* をひとつのターニングポイントとして、1990年代半ば以降、動詞および動詞が叙述する事象に関する研究は世界的に画期的な進展を見たが、それと比べると、名詞の意味と統語的用法に関するまとまった研究はほとんど見あたらない。国立国語研究所においても『動詞の意味・用法の記述的研究』(宮島達夫著、1972年)と『形容詞の意味・用法の記述的研究』(西尾寅弥著、1972年)という詳細な研究があるが、名詞を扱ったものは出ていない。海外に目を向けても、ほとんど同じ状況である。その意味で、本書は入門書であると同時に、言語学の専門書としても新たな領域に切り込むという意義を持つと思われる。

章立ては次のようになっており、日本語と英語の豊富な用例に基づいて、名詞が持つ「項」としての機能だけでなく「述語」としての働きにも触れている。

- 序章 名詞の基本的特徴(影山太郎)
- 第1章 名詞の数え方と類別(影山太郎・眞野美穂・米澤優・當野能之)
- 第2章 モノ名詞とデキゴト名詞(影山太郎)
- 第3章 ヒト名詞と道具名詞(影山太郎)
- 第4章 目的語の省略(杉岡洋子・影山太郎)

- 第5章 直接目的語と前置詞付き目的語（影山太郎・高橋勝忠）
- 第6章 中間経路と移動の範囲（影山太郎・磯野達也・境倫代）
- 第7章 名詞が動詞に変わるとき（影山太郎・由本陽子）
- 第8章 名詞情報と文の組み立て（杉岡洋子・影山太郎）
- 第9章 存在と所有の表現（岸本秀樹・影山太郎）
- 第10章 構文交替と項の具現化（岸本秀樹・影山太郎）

具体的には、助数詞の話から始まり、人間・出来事・道具という名詞の意味的区別から、文中における名詞の省略や、名詞と前置詞の関係といった名詞の統語的機能、名詞から動詞への転成や動詞から名詞への派生という形態論の現象などを扱い、名詞に関わる重要な現象はほぼカバーしていると言える。

筆者はすべての章の一部ないし全体を執筆しているが、それに加え、国語研「日本語レキシコン」共同研究プロジェクトの有力メンバー（神戸大学 岸本秀樹、大阪大学 由本陽子、慶応義塾大学 杉岡洋子）が主要な章を分担執筆している。したがって、本書は日本語レキシコン共同研究の成果の一部を反映していると位置づけられる。

『英語教育』2012年3月号（大修館書店）に掲載された書評紹介では、「本書の各章の構成は、とてもよく考えられている。最初にテーマに即した基本構文を示し、「なぜ？」と読者に問いかける。基礎的な解説、本格的な説明と続き、最後に要点を押さえた「まとめ」がくるが、これは読者の理解を大いに助ける。また、巻末の参考文献の末尾につけられた章を表す数字も読者にはありがたい。是非、一読をお勧めしたい。」（岡山大学教授 瀬田幸人）と述べられている。本書が、単に名詞に関する知識を教え込む解説書としてではなく、名詞およびそれに関連する諸現象を言語学として分析するための参考書として、言語学、日本語学、英語学の研究者や学生だけでなく、英語教育、日本語教育、自然言語処理などの方面にも活用されることを願っている。

## 影山 太郎（かげやま・たろう）

国立国語研究所長。Ph.D.（言語学）（南カリフォルニア大学）。関西学院大学名誉教授。2009年10月より現職。  
 主な著書・論文：『文法と語形成』（ひつじ書房、1993）、『動詞意味論』（くろしお出版、1996）、『ケジメのない日本語』（岩波書店、2002）、『名詞の意味と構文』（編著、大修館書店、2011）、*Voice and grammatical relations*（共編、John Benjamins、2006）。

受賞：市河賞（財団法人語学教育研究所、1980）、第22回金田一京助博士記念賞（金田一京助博士記念会、1994）。  
 社会活動：日本言語学会顧問・評議員、日本語学会評議員、日本英語学会評議員、財団法人日本国際教育支援協会理事、特定非営利活動法人言語資源協会理事。